

日本考古学の理論的・哲学的基礎  
：発掘報告書と型式（学）を中心に

中尾 央





# 日本考古学の理論的・哲学的基礎 ：発掘報告書と型式（学）を中心に

中尾 央<sup>1</sup>

## 要 旨

本稿では日本考古学の基礎について、哲学のアプローチの一つである認識論 (epistemology) の観点から理論的に検討する。まず、第2節では発掘報告書という日本考古学の基礎の一つについて、それがどのようなもので、そしてどのようなものであるべきかについて、考察する。結論としては、発掘報告書に関する認識論的議論が欠如しているがゆえに、日本考古学の営みそのものの価値・意義に疑念が呈されるような状態になっていると論じる。第3節では同様に、型式（学）に関して認識論的（主に方法論的、methodologically）に考察する。こちらも第2節と同じく、各種型式についての理論的基盤が不確かであり、大きな問題を抱えていることを論じる。全体の結論としても、理論的基礎に関する検討や議論が欠如しているがゆえに、日本考古学の妥当性に疑義を抱きかねない状態であると主張する。

キーワード：認識論、哲学、考古学理論、型式、発掘報告書

## 1. 導入

考古学にとって、理論<sup>1)</sup>の評判は必ずしも良いものとはいえない。これは間違い無いだろう。海外でも Bintliff and Pearce (2011) が編集した *The Death of Archaeological Theory?* という書籍が出版されているように、理論の評判が悪いのは日本だけでもなさそうである。

しかし、本稿はそれでも考古学、特に日本考古学にとって、少なくともある種の理論的考察が必要不可欠であること、むしろそうした理論的考察がなければ、日本考古学が信頼できる学術的研究分野でありうることは難しいだろうということを論じていく。

具体的な中身に入る前に、本稿の元になった内容についても触れておこう。筆者は2019年6月30日に日本旧石器学会第17回総会（於大正大学）のシンポジウム「旧石器研究の理論と方法論の新展開」に登壇し、発表を行った。そこでは旧石器研究のみならず、日本考古学における理論的考察の重要性について発表を行ったが、本稿ではその中で触れた論点のいくつかについて、もう少し入念に展開したものである。発表の内容については、発表予稿（中尾2019）なども参照されたい。

さて、具体的な内容を簡単に説明しておこう。本稿は日本考古学の理論的基礎を検討するが、スペースの都合上、対象を二つに絞って考察を進める。まず2節においては、発掘報告書について認識論的に検討し（認識論そのものについては2節で説明する）、発掘報告書という日本考古学の基礎の一つについて、理論的検討が必要不可欠であることを論じる。3節においては型式（学）に関して、同様に認識論的・方法論的に検討する。結論は発掘報告書と同様である。これら二つの日本考古学の基礎について検討した上で、両者に関する理論的考察が十分に行われなければ、日本考古学という学術的体系の価値・意義が損なわれ続けてしまうだろうと論じる。

## 2. 発掘報告書の認識論

本節では、日本考古学という営みの中でもっとも基礎的なものの一つである、発掘報告書について認識論的に考察しよう。

まず、認識論 (epistemology) について簡単に説明しよう。認識論とは哲学のアプローチの一つである。ギリシャ以来の伝統を持つアプローチであるが、ごく粗く言えば、「～とは何か」あるいは「～とは何であるべきか」といった問いを考察するアプローチである。

2019年12月10日受付。2020年4月26日受理。

<sup>1</sup> 南山大学文学部人類文化学科／人類学研究所 〒466-8673 愛知県名古屋市長和区山里町18

hnakao@nanzan-u.ac.jp

「～」にはさまざまな対象が入りうる。たとえば筆者が専門の一つとする科学哲学では、「科学的知識とは何か」あるいは「科学的知識と（見なされるために）はどのような条件を満たすべきか」といった問いが考察される（内井 1995）。こうした認識論的検討は、もちろん哲学的営みの一つであり、いわゆる法則や一般化を含んだ科学理論のようなものとは性質が異なる。しかし、プロセス考古学やポストプロセス考古学が「考古学とは何か」あるいは「考古学はどのような研究分野であるべきか」といった問いにまで踏み込むような、ある種の認識論的含意を持った理論であったように（阿子島・溝口 2018; 中尾 2018）、考古学の認識論的検討・基礎もまた、考古学の理論的検討・基礎の一種と捉えて良いだろう。

本節ではこの認識論的アプローチにしたがい、発掘報告書とは何か、そして発掘報告書とは何であるべきなのかについて検討する。さらに、この検討を通じ、哲学的・理論的考察がなぜ日本考古学の発展にとって必須であるのかを論じていこう。

以前、私はある本の中でこのように書いたことがある。

しかし、報告書の記載だけでは信頼できず、そこに依拠した研究には価値がないと言われるのであれば、一言くらいは反論しよう。「そんな信頼もできないものを税金使って出版しているんですか」と。さまざまな（とくに人的・時間的）限界を理解した上で、現状何が最適なのか考えておく必要があるだろう（中尾 2017：173-174 頁）

この文章を書いた『文化進化の考古学』（中尾他 2017）という書籍では、たとえば後述するような遠賀川式土器や古墳の形態、はたまた古人骨の出土頻度などに関して、発掘報告書記載の実測図や各種の情報を用いた論考を掲載した（関連研究として中川・中尾 2017；Nakagawa et al. 2017; Nakao et al. 2016 も参照）。そうした研究に対しておそくなされるであろう反論を想定し、上記のような文章を書いたわけである。予想通り、出版後には其処彼処で、発掘報告書ベースの研究は価値がない、と断ずる評価を耳・目にする機会があった。予想通りの反応が得られたという意味では、上記のような文章を書くのも無駄ではなかったというある種の安堵を感じつつも、他方でやはりこのような反応しかできないのか、という失望も感じるようになった。

世界はどうかの見識だが、少なくとも日本考古学において、発掘報告書に基礎を置く研究は、実際の遺物観察・検討に基づく研究よりも一段低く評価される傾向にあるように思われる<sup>2)</sup>。この傾向性ははつき

りと文章化される機会がほとんどないように思われるが（例外的な言及については、中尾 2018 でいくつか触れた）、日本考古学の中でかなり広く共有されている評価基準であろう。時折「コピー考古学」などという表現を見かけることもあるが、これは上記のように発掘報告書ベースの研究を揶揄する言葉であろう。

しかしまず、何よりも注意しておかなければならないのは、発掘報告書の価値を批判するのはまだしも、そう簡単に断罪するだけで良いのか、という点である。それは先の引用文でも述べた通りであり、自ら（が関係する分野）が作成した情報は信頼できないものである、などと開き直すだけでは、自らの首を自らで締めることにもつながりかねない（これはシンポジウム当日も何度か繰り返して主張した点である）。どのように締めてしまっているのかは、以下で詳述していくことにしよう。

では実際、発掘報告書というのは研究の基礎にできないほどあやふやで、価値がないものなのだろうか。しかし、たとえば発掘報告書の実測図に関する教科書などでは、発掘報告書の実測図は「客観的に」書かれるべきもので、遺物の情報を正確に表現している必要があると主張されている。たとえば小畑（2013:11 頁）では、「実測図は ... 遺物を直接観察出来ない人に客観的な情報を伝えるものです ... 正確かつ客観性を持った実測図を作成しなければなりません」と述べられる。また、『発掘調査のてびき』においても、「土器の実測は、立体的な土器を二次元の図として写し取る作業であり、報告書に掲載し、のちの研究などの基礎資料として広く公開・活用するうえで不可欠のものである」（文化庁文化財部記念物課 2010：31 頁）と書かれており、発掘報告書は今後の研究にとっての基礎資料たるべき重要性を持っているようである。こうした意図のもと、実測図が遺物の情報を客観的に表現しているもの、あるいは少なくとも表現しようとし、今後の研究の基礎資料たるべき性格を備えているのであれば、それを信頼できないと断じる背後にどのような理由が存在するのだろうか。

一つの可能性として、たとえ客観的に表現しようとしても、実測図の描き手の能力不足ゆえに（あるいは発掘報告書作成の人的・時間的制約ゆえに）情報の客観性が十分でなく、だからこそ信頼できない、という状況が考えられる。そしてこの場合、おそらくはすべての発掘報告書が信用できないわけではなく、一部の発掘報告書について、その実測図が信用できない、という状態だろう。確かに、筆者の素人目からしても不安を感じるような実測図を見かけることもある。ただその場合、実測図を十分に描けない研究者（あるいは埋蔵文化財行政関係者）を輩出している大学教育に

も責任を問うべきかもしれないし、また十分な訓練を受けていない担当者が実測図を描かねばならないというような状況のもと、人的・時間的制約が発掘報告書の質を下げているのだとすれば、それにどう対処していくか、考古学全体で対応を考えていかねばならないだろう。

また、ここで念頭に置いておくべきなのは、遺物にアクセスできない(あるいはしづらい)外部の人間にとって、そして特に考古学を専門としない人間にとっては、考古学の研究成果にできる限り直接的に触れられる唯一の手段・媒体が発掘報告書である、という点である。たとえば一部の発掘報告書の実測図が不確かで、それを基盤として他の研究を進展させられるほどには信頼できないという場合でも、外部の人間にはそれが容易に判断できないことの方が多はずである。もちろん、考古学の研究成果を利用する際には、実際に考古学に携わっている研究者と相談・議論の上で進めていくのが理想だろうし、協同することでこうした問題はある程度解消されるだろう。だが、外部の人たちに成果を発信するはずの発掘報告書が、一部であっても「信頼できないもの」として放置され、いわゆる「中の人」に聞いてみなければその真偽がわからないような状態は、果たして考古学にとって理想の姿なのだろうか。

当然、それは望ましい姿ではないし、信頼できない発掘報告書の実測図や各種情報については、改訂されたいか、と答える研究者の方が多だろう(あるいは、もう発掘報告書など信頼せず、遺物を見に行け、と答えるの方が多だろうか。そういう方は最初の引用文にお戻りいただき、お考えいただきたい)。であれば、次なる問題は誰がそれをやるのか、という問題である。本節冒頭で引用した私の文章の中で「さまざまな(とくに人的・時間的)限界を理解した上で」という但し書きをつけたように、考古学にも人的・時間的限界があるのは間違いない。そして昨今の大学・研究・行政業界を巡る厳しい現状は、この限界をさらに悪化させ続けている。こうした中で、発掘報告書の改訂を行う余裕など残されていない、それが多くの考古学関係者の思いかもしれない。そして、新規の発掘・調査の方が、古い発掘成果を整理し直すことより重要である、と考える人も多いがゆえに、発掘報告書の改訂は進まないのかもしれない。確かに、新規な発掘・調査を重視すべきか、あるいは信頼できない発掘報告書の改訂を進めるべきなのか、というのは難しい問題である。学生の教育にとっても、前者の方が有益かもしれない。しかし、後者を疎かにすることで、考古学の信頼性が下がることはあっても上がることはない、ということもまた、揺るぎのない事実であ

る。実際、信頼できない情報を改訂したり、補足したりして後世に伝えていくことに、新たな発見と同様の学術的価値が置かれるというのは、学術的研究分野としてはあまりにも当然のことだろう。この点に関しては、自由のあまり効かない埋蔵文化財行政関係者よりも、比較的自由が効く大学・研究機関関係者の方に責任があると言えるかもしれない。

別の可能性として、発掘報告書の軽視は「一次情報・リソースとしての遺物を最重要視すべきであり、二次情報・リソースとしての発掘報告書はそれ以上の価値を持たないという意味である」という主張もできるだろう。この反論は十分に理解できる。しかし、それを使用することで研究としての価値が下がってしまう、あるいはなくなってしまうような二次情報・リソースの価値とは、一体なんなのだろうか。二次情報・リソースの限界について理解する必要はもちろんあるだろうが、だからといって二次情報・リソースの価値そのものをすべて断罪する必要はないはずである。すなわち、発掘報告書を基礎とした研究でも、一定の価値は見出されるはずなのである(どこまでの価値が見出されるべきなのかについては、文脈や報告書の内容次第であろう)。

実際、考古学以外のさまざまな分野では、ある種の二次情報・リソースを基礎にしたメタ分析が行われている(e.g., Cooper et al. 2009; 山田・井上 2012)<sup>3)</sup>。こうした研究の場合、遺物に相当する一次情報・リソースは、ヒトの行動や自然界の現象そのものであり、論文などで発表された情報・データは二次情報に当たるだろう。これをメタに検討するのが、メタ分析である。考古学でこのメタ分析を行うとすれば、一体何を参照すれば良いだろうか。論文のデータを参照することももちろん可能だが、それもかなり限られている。とすれば、膨大なデータ・情報が蓄積されている発掘報告書も参照せざるを得ないだろう。ここで、発掘報告書のデータ・情報がメタ分析に耐えないという評価を下すのであれば、「のちの研究などの基礎資料として広く公開・活用するうえで不可欠のものである」はずの実測図などは、一体何に使えるものなのだろうか。今の発掘報告書は目指すべき姿に近づけていないだけだと言われる方がおられれば、是非とも目指すべき姿に発掘報告書が近づけるような努力を期待したいところである。

実測図などの客観性について、もう少し議論を続けておこう。もし、実測図や発掘報告書全体が客観的な情報の伝達を目的としているのであれば、どうして写真ですべてを済まさないのだろうか(手書きの情報より、写真の方がはるかに客観的に情報を伝達できるはずである)。しかし、写真はあまり重要視されていな



いように思われる。これはどうしてだろうか。

ありうる可能性としては、実測図などは客観性以外の何かも伝えようとしている、すなわち、実測図の方が写真よりもある意味「客観的」であるという答えが考えられるだろう。たとえば、実測図は遺物から客観的に情報を抽出することが目的なのではなく、むしろ報告者がどれだけ遺物から重要な情報を抽出できているかが重要である、というような主張も考えられる。少し長くなるが、引用しよう（類似の主張は一瀬 2013：61 頁；田中 2019：19 頁；藤本 2000：112-116 頁なども参照）。

… 実測図は、絵やスケッチとは異なり、計測にもとづく精度と、制作技法や使用痕跡などの観察結果の記入が求められる。ただし、たとえば土器の器表面のハケ目調整まで一本ずつ厳密に測ることは現実的ではなく、むしろ、製作技法のあらましを確実に図示することが必要となる。つまり、実測図は、遺物の情報を凝縮した解説図であり、そのために、必ずしもありのままを描写するのではなく、模式的な表現が求められる場合もしばしばである（文化庁文化財部記念物課 2010：19 頁）。

こうした意味での「客観性」は、たとえば 19 世紀の科学者などに共有されていた規範と似たところがあるかもしれない（Daston and Galison 2007）。当時の客観的知識とはすなわち、現象に表れているものではなく、むしろその背後に隠されたある種の本性を明らかにするもの、というニュアンスであった。

ただ、上記引用文のように、重要な情報を凝縮し、浮かび上がらせることを第一の目的とする場合、何が重要な特徴なのか、という前提についても明記しておくべきだと考えられる。しかし、残念ながらそうした情報が体系的に記述されることはほとんどない。もちろん、各種遺物にある程度共通した特徴であればある程度体系化されてはいるが（文化庁文化財部記念物課 2010）、たとえば型式ごとで重要な特徴が変わりうるような場合、前提が十分に明確化されることは非常に少ない。こうした前提の記述がなければ、この前提を共有できない人間、特に外部の人間にとっては実測図の意義がわかりづらくなってしまい、不親切でしかない。これらの点は次節で論じる型式（学）とも関連するので、そちらでさらに議論を展開する。

また、実測図などでこうした情報の凝縮が重要視されるのであれば、3 次元データが実測図に置き換わるということもありえないのかもしれない。言うまでもなく、近年 3 次元データの活用が各所で話題であり（中園 2017）、当の筆者もそうした研究プロジェクトの代

表まで務めている（新学術領域研究計画研究「三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進」No.19H05738）。3 次元データ収集やそれを元にした研究に関する問題点は（1）データの容量が大きくなりすぎ（たとえば一つの土器をそれなりに精巧に 3 次元スキャンしたりすれば、ある程度汎用性のある STL ファイルでも、すぐに数 GB を超えるデータになってしまう）、データの公開スペースを準備しておくことも容易ではない、（2）精巧な情報を得ようとすれば高額な機器が必要になる（SfM—Structure from Motion—のように 2 次元写真データから 3 次元データを復元する技術でも、精巧さを求める場合にはそれなりのスペックを擁したコンピューターが必要になる）といった点である。これら二つ、そして重要な情報の凝縮・抽出という目的と合わせて考えれば、広くアクセス可能であるべき発掘報告書が現在抱える問題は、3 次元データの登場ですぐさま解決できる問題でもなさそうである。

結局のところ、発掘報告書はどこまで、どのような価値・意義を持つものなのか、そして持つべきなのか。もちろん、発掘報告書の価値は、情報の種類や文脈、そして先述したような発掘報告書の種類にも依存するだろうが、ここまで述べてきたように、現状ではどのような価値を持つものとして発掘報告書が出版され続けているのか、理解が極めて困難なのである。実際、「正確かつ客観性を持った実測図」を書かねばならない、あるいは「遺物の情報を凝縮した解説図」であり「のちの研究などの基礎資料として広く公開・活用するうえで不可欠のもの」と言われているはずの実測図を用いて研究をしようとしても、価値がないと言われてしまう。しかしそれでも、考古学は今もまた新たな発掘報告書を出版するし、今後もそれを継続するのだろう。だとすれば、そこには何らかの意味や価値があるはずである。どうしてはっきりと、その意味や価値が明文文化されないのだろうか。考古学の基礎の一つに関して、そうした明文化がなされていないというのは、学術的体系としての日本考古学の健全性にとって大きな問題だろう。実際、発掘報告書がどのようなもので、どのようなものであるべきなのか、発掘報告書に関する理論的な主張・議論がもう少ししっかりなされているのであれば、あるいは不確かな発掘報告書の改訂などが日々行われているのであれば、それらを参照して、外部の人間も注意深く使用することが可能である。しかし残念ながら、現実はそのようなものではない。考古学の基礎の一つが、この現状なのである。

本節を締めくくるにあたって、手前味噌で恐縮だが、自らの文章をもう一つ引用しよう。

日本考古学の「型式学」は、古くからの研究者の徒弟主義的学習と経験的直観とがないまぜになった一種の技芸であり、非言説的・非体系的であって、その意味で「学」と呼べるようなディシプリン性はなく、せいぜい「型式論」といった程度の呼び名がふさわしい(中尾・松木 2017: ii 頁)

直接的には次節で扱う型式(学)についての文章だが、発掘報告書にも「徒弟主義的学習と経験的直観とがないまぜになった一種の技芸であり、非言説的・非体系的であって」という部分はまったく同様に当てはまるだろう。もちろん、型式(学)と同様に、「ある程度」の体系化はなされている。しかし、その体系、そして目指すべき(だと考えられる)姿を現実と照らし合わせたとき、あまりにも矛盾が多すぎ(あるいは理想とされている姿と現実との乖離が酷く、しかも理想へ近づこうとしているのかどうかさえわからない状態なので)、外部の人間としては困惑しかない。

本節の議論をまとめておこう。発掘報告書は、おそらくは日本考古学の基礎の一つであると考えられる。問題なのは、この基礎が一体どのような情報を伝え、また伝えることを目的にしているのか、非常に不確かなままになっている点である(たとえば、研究の基礎資料であるはずの報告書をベースとした研究が、不当に低い評価を受けることが多い)。その意義・価値についてきっちりとした議論が行われないうまま、今後の発掘報告書が出版され続けるのであれば、日本考古学の営みそのものの価値・意義にまで、疑念を呈されることになりかねないだろう<sup>4)</sup>。

### 3. 型式(学)の認識論(方法論)

本節では前節と同様、型式(学)について認識論的に検討する。結論を先取りすれば、型式(学)についても発掘報告書と同様、理論的考察の欠かゆえに非常に不確か(あるいは先述の引用文を用いるなら、「非言説的・非体系的」な状態であると論じる<sup>5)</sup>。

型式(学)は、発掘報告書とは異なり、近代考古学の祖であるモンテリウス(1903)、そして日本においては日本考古学の祖である濱田耕作(1916)以来の伝統を持った手法だろう。確かに各種考古遺物はこれまで、数えきれないくらいの型式に分類され、考古学研究の発展を支えてきた、と言えるかもしれない。

こうした型式(学)については、さまざまな角度から理論的検討が可能である。第一に、型式(type)とは何か、という問いを立てることが可能だろう。しかし、この問いは本稿では取り扱わない。大きな理由として、分類区分に関する認識論的検討として生物学的

種(species)に関する理論的検討を念頭に置いた上で、十分に型式そのものについて論じることはスペース的に不可能である、という点が挙げられる。生物学的種に関しては本当に各種の議論が蓄積されており(たとえば三中 2009; Richards 2010 など)、型式についてもこうした議論をある程度参照しなければ、「型式とは何か」という問いには答えづらいように思われるからだ。

代わりに、本稿では型式の取り扱い方について論じていく。したがって、認識論の中でもどちらかという方法論的検討、すなわち、型式分類を行っていく際、あるいは型式に言及しながら議論・考察を進めていく際の手続きに関する問題を考察していくこととする。

多くの場合、何かしらの特徴に基づき、発掘された遺物は型式に分類される。土器の場合、たとえば紋様、口縁部の形態、あるいは全体の概形、製作技法、などから各種の型式に分類されていくであろう。

ではこうした型式分類にどういった問題が考えられるのだろうか。それは、先ほどの引用文で指摘したような、型式(学)の非言説・非体系性である(中尾・松木 2017: ii 頁)。何よりもまず、型式分類においては各種型式が明確に定義されているわけではない。以前、遠賀川式土器について研究を進めるため、遠賀川式土器にまつわる各種の論争を整理しようと試みたことがある(田村他 2017)。この整理の中で一番苦労したのが、「そもそも遠賀川式土器とはどのような特徴を持つ土器であって、どのように定義されているのか」という点であった。もちろん、遠賀川式土器がどのようなものであるかを知りたいければ、遠賀川式土器と呼ばれている土器を実際に見にいけばいい話である。実際、筆者所属大学の博物館にも遠賀川系土器が所蔵されており、何度も見に行ったり3次元計測をさせてもらったりしている。だがたとえば、生物学的種の場合、この種はこのようなものである、という定義が何らかの形でなされている。生物学的種の場合はゲノムや形態情報にもとづく系統推定の結果などから判別する場合もあるし、ホロタイプ(holotype)と呼ばれ、その種の判定基準となるような個体が存在する場合も多い(藤田 2000; 三中 2006)<sup>6)</sup>。さらに、新種を報告する記載論文には、かなり厳格な規定にしたがった報告内容が求められる。しかし、遠賀川式土器の場合、こうした基準は明文化・体系化されないままに議論が進められてしまっている。如意形口縁、刻目などといった特徴が当然のごとく語られることは確かにあるが、明確な定義が語られることはまずない(柴田 2014; 藤尾 2002; 豆谷 2009; 家根 1997)。最低限、どこにそうした定義が記載されているのか、どこにいけばホロタイプのような典型的土器が確認できるのかを明示してくれば確認できるのだが、それさえな



い状態なのである<sup>7)</sup>。

唯一の例外的議論が土器持寄会論文集刊行会（2000）かもしれない。ここでは遠賀川式土器の定義を巡って各種の議論が行われている。だが残念なのは、「各地で認識されている遠賀川式土器の特徴は、「斉一的」と各人が思うほど共通した型式として認定するには無理がありそうです」（同上：76頁）と述べられる程度の総括がなされるのみであり、各種遠賀川式土器の共通点や相違点について、結局十分な体系化がなされていない点であろう。

これは遠賀川式土器だけの問題でもなさそうである。甕棺の場合、橋口（2005）の中で詳細な型式分類とその具体例が記載されているが、ここでも明確な定義が行われているわけではない。おそらくはもっとも出土事例が多く、また比較的明瞭に区別できると考えられる、弥生時代中期後半前葉のKⅢa式について、型式の説明を一部引用してみよう。

KⅡc式の基本形を踏襲しながら口縁下に凸帯を付すもの、内外に口縁が発達し、いわゆるT字形を呈し外に低く傾斜する口縁をもち口縁下がすばまり口縁下に凸帯を付すもの、口縁は外側に発達し外に低く傾斜するもので胴上半はほぼ直立し口縁下に凸帯を付すものなどがある…これらの他に、例えば門田K41、宝台K8、折尾分類の金隈Ⅲc式にあげられた金隈K1278のように胴上半部はほぼ直立するか、または口縁下がすばまる傾向があり、口縁はほぼ平坦で、胴部凸帯がコ字形を呈し、次のKⅢb式に近い形態を示すものなどもこの型式の範疇として、同一型式内での形態変遷としてとらえたい（同上：55頁）。

詳述しようとしている意図はわかるが、一言で言ってしまうと、「おおよそ」はわかるがそれ以上でもそれ以下でもない記述である。まず、「すばまり」、「低く傾斜」する、「ほぼ直立」とあるのは良いが、その程度が不明である（角度くらい書いてくれても良いものだが）。次に、各種の典型例らしき特徴が挙げられているが、どれが優先されるのかもわからないし、平等な並列条件なのかも不明である。また、後半は例外の説明に入っているように見えるが、それが例外視される基準も不明であるし、その例外がどうしてKⅢa式に属すとみなされるのかもわからない。典型例らしき甕棺の実測図が次の頁に紹介されるが、その典型例もかなりの多様性が見られる（同上：56頁）。最後に、KⅢb式に近い変遷過程の甕棺について、どうして最終的にKⅢa式に分類されてしまうのか、その理由についても説明は不十分である。こうした型式条件の曖

昧さが、先述した実測図で抽出すべき情報の非明文化にも繋がっているのだろう。

結局、特定の甕棺がKⅢa式に属するか否かを判定する際、これらの条件を頭に入れ、「おおよそ」の感覚で判断するしかない状態のように見えるし、実際、私も必要な場合にはそうするしかない状態である（中川他2019）。こうした判定能力を、時に「鑑識眼」と呼ぶのであろうが（時津2007、もちろん素人でしかない私にそのような鑑識眼があるはずもないが）、鑑識眼がなくては型式分類ができないというのは、どこかのテレビ番組で行われている鑑定士の作業とどう異なるのであろうか。先の引用文での「徒弟主義的学習と経験的直観とがないまぜになった一種の技芸」とはまさに、この状態を示しているのである。

もちろん、それが果たして学術的方法として望ましいものなのかどうか、これは議論が多少分かれるところかもしれない。まず、鑑識眼による鑑定が学術的方法として望ましいものかどうかを検討しておこう。鑑識眼によってしか型式分類が不可能、あるいは少なくとも鑑識眼が型式分類にとって重要な場合でも、異なる人物による鑑定結果がおおよそ一致するのであれば、さほど問題にはならないだろう（おそらくは、現状の型式分類はこの状態である）。問題は、異なる人物による型式分類が一致しないような場合である。この場合、どちらの型式分類が的確かを議論しなければならない（どちらでも良いのであれば、もはやそれはanything goesの状態だろうし、さすがにこれを望ましい状態であるとする研究者はごく少数だろう）。しかし、こうした議論には鑑識眼の背後にある前提条件・基準を明らかにしておかねば、議論がすれ違うことも少なくないだろう。このように、鑑識眼で型式分類をしていたとしても、分類条件を明確にしておかねば、今後困ることになるだけである。

実際、鑑識眼は型式分類にとってさほど重要ではないと思われる。鑑識眼を持った学生を育てているより、鑑識眼の背後にある条件を明らかにし、それを学生に伝えた方がより効率よく、そしてより広くかつより正確に型式分類は行われていくだろう。ここで「確かな鑑識眼を持っていないければ、そうした基準にしたがっても確かな型式分類はできない」といった反論が出てくるかもしれない（実際、いわゆる「鑑定士」からはこうした反論がなされそう）。しかし、そうした不確かな型式分類が行われてしまうのは、型式分類基準が曖昧か、修正を必要としている状態なだけであり、いちいちそこで鑑識眼を持ち出す必要はまったくない。

もちろん、基準にしたがって分類していく中で、鑑識眼のようなものを身につけてしまうこともあるだろう



うし、現場ではそうした鑑識眼が活かされる場合もあるのかもしれない。だが、最終判断を行う際には、参照すべき基準を参照し、鑑識眼が正しいかどうかを確認するのが誠実な手順だろう。したがって、鑑識眼は役に立つ場面もあるだろうが、決して「必要」とされるべきではない。

とはいえ、確かに人文学は技芸的要素・側面を持っている（だからこそ英語で arts と呼ばれるのだろう）。文献の解釈などは実際そうなのかもしれない。そしてもし型式学が人文学的方法であるというのであれば、他の人文学的方法と同様、技芸的要素は維持されていても問題ないと言えるかもしれない。だが、型式学がもし生物学的な分類と類比的に語られ、またできうるかぎり研究者の主観を排したものを目指すとするのなら（横山 1985）、上記のような「おおよそ」の記述で型式を説明していて良いとも思えないし、技芸ではなく、むしろできる限り明文化・体系化した分類基準が必要だろう（もちろん、分類基準が一意に決まらず、ある程度の議論が残されたままになってしまう可能性もあるが、それはそれでどの基準を採用するかを明確にして研究を進めればよいだけである）。しかし、現時点では型式の定義に関して、そのような基準はほとんどなされていないように思われる。

ここで、型式分類は分類基準を明文化・体系化する必要などない、という主張もありうるのかもしれない。そうした立場を取る人からすれば、本稿での批判は的外れになるだろうし、実際、型式分類がどのようなものであるべきか、といった点についても議論が必要なのは間違いない。ただ、こうした立場が維持できるかどうかに関して、筆者は非常に懐疑的である。そもそも、ここまで極端な立場をとった上で、どうやって型式分類の論文を書くのか、筆者には想像がつかない。もちろん基準を明確化するわけにはいかないのが、実測図、写真や動画のみの論文を發表するのだろうか。

また、型式の定義が曖昧であるからといって、これまでの型式分類のすべてが疑わしくなる、というわけではない。確かに、「おおよそ」類似した遺物は「おおよそ」うまく分類できているようにも見える。そしてこの「おおよそ」の分類をより詳細に行おうとするのが、型式の細分化だろう。だが、型式分類とは一体どのような方法なのかと問うたとき、「おおよそ」の基準にしたがって「おおよそ」の感覚で分類し続けている状態である、と答えを返さざるを得ないのは、決して望ましい状態ではないだろう。しかも、これが型式分類を初めて 100 年以上経った現状である、という点にも注意しておかねばなるまい。たとえば、数理的に型式学を立て直す機会は、これまでいくらでもあったはずである（中尾・松木 2017）。

本節の議論をまとめておこう。日本考古学の基礎の一つである型式（学）について、特に諸型式の定義に関する曖昧さや、方法論的問題を指摘した。各型式についてさらに明確な体系化や定義がなされない以上、現状行っている型式分類は「一種の技芸」に過ぎず、それは型式分類が目指している目標とは相入れないものように思われる。実際、改善の余地はいくらでもあるだろう。したがって、発掘報告書と同様、型式（学）も現状では非常に不確かなものであり、それを礎の一つとする日本考古学の学術的体系としての信頼性は、疑義を呈さざるをえない状態である。

#### 4. 結 語

ここまで発掘報告書（特に実測図）および型式（学）について認識論的に検討してきた。結論としては両者とも同様である。両基礎は非常に不確かな側面を抱え、それゆえ日本考古学は、あまりにも不安定な基礎の上に構築されていると言わざるを得ない。したがって、日本考古学は現状、砂上の楼閣のようなものとも言えるかもしれない。今後の発展のためには、上記のような問題点を克服していく必要があるのは言うまでもない。これまでさまざまな理由・制約から放置されてきた問題かもしれないが、もうこれ以上放置したままでは、日本考古学という営みそのものが、信頼できないものとみなされる可能性も十二分にありうるだろう。

最後に、もう一言だけ述べておきたい。上記の批判はあくまでも日本考古学が今後、健全に発展していくことを念頭に置いて論じたものである。筆者の理解が不十分な点も多数あるだろうし、そうした点については是非ともきっちり本誌のような公的な場所においてご指摘いただき、議論を行えるようにしていただければと切に願う。日本考古学の健全な発展を願う・目指すという目的を唯一のものとし、その目的を果たすための最善策が何なのか、関係者が平等に参加できる場所において、建設的な議論がなされることを期待したい。

本研究は日本学術振興会科学研究費若手研究(B)「考古学理論・実践の歴史・哲学的考察に基づく人文学の哲学の基盤構築」(No.16K16685、代表：中尾央)、基盤研究(C)「古墳時代鉄鍬の変化と地域性に関する数理的解析」(No.17K03226、代表：松木武彦)および新学術領域研究(研究領域提案型)計画研究「三次元データベースと数理解析・モデル構築による分野統合的研究の促進」(No.19H05738、代表：中尾央)の支援を受けた。また、(日本考古学に対する批判的な論考であるという)本稿の性質上、実名は出せないが、各種関

係者から極めて有益なコメントを数多く頂いた。2名の査読者からも有益なご指摘をいただいた。合わせて感謝したい。ただし、言うまでもなく、本稿の内容の責任はすべて筆者に帰される。

#### 註

- 1) 「理論」の定義はそう簡単ではないが、ここでは遺物や遺構などに必ずしも直接言及することなく（もちろん理解を助けるための具体例として言及する場合は少なくないだろうが）、その研究法や方向性（の妥当性）、あるいはそれらを解釈するためのより一般的な枠組みを論じ、提示するものを「理論（的）」な議論・研究として想定している。
- 2) これは著者が直接的に体験することも少なくない傾向性であるが、予稿および旧石器学会のシンポジウムなどで取り上げた遺物主義、すなわち遺物の直接的な観察を最重要視する傾向性を裏返したものと考えれば、一定程度広く見られる傾向性と考えるとよいだろう。
- 3) 考古学の内部でももちろんメタ分析は行われている（松本・中園・河口1999；川宿田2009など）。
- 4) 特に実測図については、客観的に描かれるべきものなのか、あるいは観察者の解釈などを含めるべきなのか、各所で議論が行われているようである（考古学技術研究会2001など）。この点をご指摘いただいた査読者に感謝したい。ただここで問題視しているのは、こうした議論が明示されることなく、その実測図が果たしてどのような意図のもとに描かれているのかわからないまま、蓄積されている点である。
- 5) 類似した（しかし、より穏健な提案としての）型式（学）への批判については新納（2014）、中園（2014）なども参照。
- 6) もちろん、分類のための方法についても各種議論は存在するが、後述するようにこうした議論を踏まえた上でどのような手法を用いて分類したかを明記しておけば、本稿でのような批判は当たらないだろう。
- 7) ここではもちろん、型式分類は生物学の分類と厳密に同じ方法に従うべきだ、と論じているわけではない。型式分類が果たしてどこまで何をを目指したいのかが不明瞭であり、また現時点で日本考古学の基礎的な方法の一つと見なされ、そして実践されているからには、各型式にもう少しはっきりとした定義を与えなければどうしようもないだろう、と論じているのみである。個人的には、そもそも型式分類にそこまでこだわる必要はないだろうと考えているが、それは別の機会に論じることにはしたい。

#### 参考文献

- 阿子島香・溝口孝司監修 2018『ムカシのミライ：プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話』、248頁、東京、勁草書房
- Bintliff, J. and M. Pearce. (editor) 2011 *The Death of Archaeological Theory?*, 89p., Oxford, Oxbow Press.
- 文化庁文化財部記念物課監修 2010『発掘調査のてびき：整理・

- 報告書編』、318頁、東京、同成社
- Cooper, H., L. V., Hedges, and J. C. Valentine (editor) 2009 *The Handbook of Research Synthesis and Meta-analysis*, 615p., New York, Russell Sage Foundation.
- Daston, L. and P. Galison. 2007 *Objectivity*, 504p., New York, Zone Books.
- 土器持寄会論文集刊行会 2000『突帯文と遠賀川』、1240頁
- 藤尾慎一郎 2002「瀬戸内における遠賀川系甕の成立過程：弥生土器瀬戸内起源説の検証」古代吉備研究会委員会編『環瀬戸内海の考古学：平井勝氏追悼論文集 上』、283-312頁、岡山、古代吉備研究会
- 藤田敏彦 2010『動物の系統分類と進化』、206頁、東京、裳華房
- 藤本 強 2000『考古学の方法：調査と分析』、231頁、東京、東京大学出版会
- 濱田耕作 2016[1916]『考古学通論』、288頁、岩波文庫
- 橋口達也 2005『甕棺と弥生時代年代論』、257頁、東京、雄山閣
- 一瀬和夫 2013『考古学の研究法』、217頁、東京、学生社
- 川宿田好見 2009「多変量解析を用いた研究動向分析—土器研究を対象として」『鹿児島国際大学大学院学術論集』1: 13-26
- 考古学技術研究会 2001『考古学において遺物の実測とは何か』、38頁、考古学技術研究会
- 豆谷和之 2009「西日本における遠賀川系土器の成立と西からの影響」設楽博己・松木武彦・藤尾慎一郎編『弥生時代の考古学2：弥生文化誕生』、123-139頁、東京、同成社
- 松本直子・中園聡・河口香奈絵 1999「フェミニズムとジェンダー考古学」『HOMINIDS』2: 3-24
- 三中信宏 2006『系統樹思考の世界：すべてはツリーとともに』、296頁、東京、講談社
- 三中信宏 2009『分類思考の世界：なぜヒトは万物を「種」に分けるのか』、336頁、東京、講談社
- Montelius, O. 1903 *Die Typologische Methode*, 110p., Stockholm, Asher.
- 中川朋美・中尾 央 2017「人骨から見た暴力と戦争：海外での議論を中心に」『日本考古学』44: 65-77
- Nakagawa, T., H. Nakao, K. Tamura, Y. Arimatsu, N. Matsumoto, and T. Matsugi. 2017 *Violence and Warfare in the Prehistoric Japan, Letters on Evolutionary and Behavioral Science*, 8(1): 8-11. doi: 10.5178/lebs.2017.55
- 中川朋美・中尾 央・田村光平・山口雄治・松本直子・松木武彦 2019「弥生時代中期における戦争：人骨と人口動態の関係から」『情報考古学』24(1-2): 10-29
- 中尾 央 2017「おわりに」中尾央・松木武彦・三中信宏編『文化進化の考古学』、166-176頁、東京、勁草書房
- 中尾 央 2018「考古学理論との対峙：プロセス考古学とポストプロセス考古学」阿子島香・溝口孝司監修『ムカシのミライ：プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話』、1-20頁、東京、勁草書房
- 中尾 央 2019「Practice without theory is blind (and theory without

- practice is empty)』『日本旧石器学会シンポジウム予稿集第17回』: 71-74
- 中尾 央・松木武彦 2017「はじめに」中尾央・松木武彦・三  
 中信宏編『文化進化の考古学』、i-viii 頁、東京、勁草書房
- 中尾 央・松木武彦・三中信宏編 2017『文化進化の考古学』、  
 224 頁、東京：勁草書房
- Nakao, H., K. Tamura, Y. Arimatsu, T. Nakagawa, N. Matsumoto, and  
 T. Matsugi. 2016 Violence in the Prehistoric Period of Japan: The  
 Spatiotemporal Pattern of Skeletal Evidence for Violence in the Jomon  
 Period, *Biology Letters*, 12: 20160028. doi: 10.1098/rsbl.2016.0028
- 中園 聡 2014「型式学は有効か」考古学研究会編『考古学研  
 究 60 の論点』、91・92 頁、岡山、考古学研究会
- 中園 聡編 2017『3D 技術と考古学(季刊考古学 140 号)』、112 頁、  
 東京、雄山閣
- 新納 泉 2014「型式学は有効か」考古学研究会編『考古学研  
 究 60 の論点』、89・90 頁、岡山、考古学研究会
- 小畑三千代 2013『土器の実測をしよう!— はじめて実測を試み  
 るあなたへ』、81 頁、福岡：九州文化財研究所
- Richards, R. 2010 *The Species Problem: A Philosophical Analysis*,  
 236p., New York, Cambridge University Press.
- 柴田将幹 2014「初期遠賀川式土器の成立地域と伝播」『季刊考  
 古学』 127: 19-23
- 田中英司 2019『石器実測法：情報を描く技術』、102 頁、東京、  
 雄山閣
- 田村光平・有松 唯・山口雄治・松本直子 2017「遠賀川式土  
 器の楕円フーリエ解析」中尾央・松木武彦・三中信宏編『文  
 化進化の考古学』、32-65 頁、東京、勁草書房
- 時津裕子 2007『鑑識眼の科学：認知心理学的アプローチによ  
 る考古学者の技能研究』、207 頁、東京、青木書店
- 内井惣七 1995『科学哲学入門：科学の方法・科学の目的』、286 頁、  
 京都、世界思想社
- 山田剛史・井上俊哉編 2012『メタ分析入門：心理・教育研究  
 の系統的レビューのために』、272 頁、東京、東京大学出版会
- 家根祥多 1997「朝鮮無文土器から弥生土器へ」『立命館大学考  
 古学論集』 1: 39-64
- 横山浩一 1985「型式論」近藤義郎・横山浩一・甘粕 健・加藤  
 晋平・佐原 真・田中 琢・戸沢充則編『岩波講座 日本考古  
 学 1：研究の方法』、43-78 頁、東京、岩波書店

## Theoretical and Philosophical Examinations of the Foundations in Japanese Archaeology

Hisashi NAKAO

The present article examines the theoretical foundations of Japanese archaeology epistemologically. The section 2 epistemologically examines excavation reports as one of the foundational works in Japanese archaeology, i.e., what excavation reports are and should be. It is argued that with a lack of epistemological justification of excavation reports, their epistemological status is highly puzzling. The section 3 also epistemologically and methodologically examines types or typology as one of the foundational methods in Japanese archaeology and it is claimed that definition of each type is ambiguous and not systematic. Taken together, as a conclusion, since some of the theoretical foundations in Japanese archaeology are epistemologically problematic, it might lead us to conclude that Japanese archaeology itself is epistemologically questionable.

**Key Words:** Epistemology, Philosophy, Archaeological theory, Type, Excavation reports

